

昭和十八年十二月二十三日 第三編 第五百七十七號
昭和十八年四月一日發行 每月一日發行

目 次

信仰と倫理の根據及應用	………	聖 應 院
優婆塞戒經要解(其九)	………	本 多 日 生
開 目 鈔 講 話(承前)	………	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(二十二)	………	河 合 陟 明
記 事		
○本多上人第十三回忌を迎えて		
○本部園報		
○入帳報告		

第 四 十 八 年 四 月 號

統

財 團 法 人

統 一 團 發 行

財團 法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定兼ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

第一佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ眞實ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培榮シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講談會ヲ開辦シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ襄贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ納付セラル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

信仰ニ倫理の根據及應用

聖 應 院

佛教は倫理の根柢を爲し、實行力を與へるものでありますが、江戸時代には儒者が佛教を知らずして佛教の惡口をいつた、さういふ思想が現代にも残つて居るが、本當の佛教の倫理觀といふものは、世間に向つて徹底的に教へるものであります、世間の倫理といふものは實は極めて淺薄なものであります。佛教倫理の根據といふものは、人間の心に根ざして居るのである、所謂「心地觀經」の心地觀であります。佛教は到る處に心を根據にして倫理の基礎を説明して居ります。儒教でも性善といふことが倫理の基礎になつて居る譯であります。併し唯それは性が善であるとか惡であるとかいふことを論じて居ますが、佛教の心地觀は、實に微に入り細に亘つて玄妙を極めて居ります。

凡そ世界の宗教學に於て、佛教位人間の精神を詳細に徹底的に研究して居るものは無い、それで倫理の根據に就ても、どうしても人間の心を本にして解釋して行くことが、一番確實なものであります。その場合に廣いことを言へば盡きないから、心地觀經の思想を考へると、世の中に現はれる一切の善惡すべてが人間の心を本とすること、大地の草木を生ずるが如きものである、良き花も臭き草も皆大地より發して居ります。その通り人生に現はれる善惡萬般の事は皆人の心を本とするのである、故に世に善を行ひ惡を止めるといふことも、皆心を觀照して、心を修養することより始まる、先づ心を端しくすることより起るといふことは、佛教の倫理の根柢であります。而して法華經に至つてはその思想を一段深めて來て、即ち藥師證品に説いてあるが如く「一相一味」といふてある。一切の人間は表面から見

るから賢愚惻鈍の別があるけれども、徹底したら同じ相である、一寸味へばうまい奴と、まづい奴とあるけれども、能く嗜みしめれば皆同じやうにうまいものであるといふ、一相は眼で見えていふから相(すがた)といつたのである、味は舌で感ずるのである、これは非常に良い言葉であります。一相一味といふことは、一切のものはその相に於て——表面に於ても能く見れば一つである、その質に於ても嗜みしめれば同じ味であります、而して非常にうまいものである、皆佛性を有するといふ、それが佛教の倫理の根柢であります。

然らばどういふ相かといふと、その次の言葉がそれを説明して居る、即ち「解説相、離相、滅相」といつて居る。解説相は前に申した通り、如何なる者でも苦しみを解説したい、苦を去つて樂に就きたいといふ希望は人間の自然であります。決して不自然にこれは無理に求めるものではない、人間の精神欲求の儘のものである、何者でも苦を解説しようとするものであります。それから離相といふのは、遠離するといふことである、即ち惡を遠離せんとするものである。誰でも惡人になつてやらうとは思つて居ない、どうか善人になりたい、惡より遠離せんとするものであります。それから滅相といふのは、正しきものを妨げて居る——つまり月にかゝる村雲、珠を掩ふ塵埃を拭つて光を發揮しよう、佛性を覆うて居る總ての妨害物を打滅ばして、さうして無限の光輝を發射せんとする所の大向上心を有つて居るものである、如何なる強かな者でも、惡人の如く見える者でも、能く嗜みしめれば皆同じこの味ひを有つて居る、要するに苟も人間として心を有する者は、大向上心を有する、總ての草木は太陽に向つて皆伸びつゝある、如何に小さな草の一本でも、皆起き返つて伸びんとするものである、その通りに如何に虚けられて居る所の人間でも、膝さへあれば向上しようとする所のものである。一切の者は皆涅槃の城に向つて歩み寄りんとする月上姫を慕ふ衆生みたやうなものであります。何者か涅槃に向つて歩まざる者ありや、これが佛教の人生觀であり、又それが倫理の根柢を爲すのであります。唯孟子がいふやうに、性が善だといふ位のまどろっこいことではありません、丁度荀が地中から出るのに、瓦があれば瓦を押しつけて、椽の下から土を突き破つても伸びて行かうとするやうな精神を有

つて居るものである、チョツと出る所に石が邪魔になつて居る。その石を除けてやれば喜んで伸びるものである、さういふやうに大向上心を以つて、人間は善を爲すべく悦んで向上するものであります。心の中に煩惱があり、外にこれを助長するものがあるから、割合に人生は混濁になつて居るのである、その心の煩惱を鎮めて、世の中の妨げになるものを無くして、所謂社會を改善して行くならば、人は各々向上して、人生は圓滿なる社會を實現するものであるといふ理想に立つて居る、これが一つの心を本にした佛教倫理觀の根柢であります。

次に宇宙を見るのであります、天地の大原則といふか、そこには因果の大規律といふものが行はれる。それは物質界にすべて因果律の行はれることは、西洋でも皆いうて居るのであります、如何なる生物と雖も、原因なくして生じたる者はない、凡そ宇宙に現はれる現象は悉く原因を有すといふことが眞理の大妙致であり、その通りにこれを倫理觀に應用したるものが即ち佛教であります。總ての行爲は必ず結果を生むべき力を有するもので、その爲したる事が若し惡であるならば、それが原因となつて己を墮落せしめる結果を生み、その爲したる事が善であるならば、必ずや向上を助ける所のものであります。凡そ一舉一動は皆悉く不滅の力を有つて、己を或は禍に導き、或は幸に導くものであるから、一言一行悉く慎んで行かなければならぬといふのである。いかなる力を以つてもこの因果法を覆へすことは出来ない、梵天王、四大天王の如き絶大なる力があつても、この因果の法則は托げることが出来ない。閻魔法王と雖も、青鬼と雖もこの法則を托げることが出来ない、又いかに多數を以つて壓迫を試みても、これを破ることは出来ない、國王の權威を以つても駄目であります。その代りに善を爲したる者を憎んで、いかなる妨害をしても、何等の妨害をも受けずして向上して行く、この因果の法則は絶対の權威を有つものであるといふことを根柢にして、人々の倫理心を鼓舞作興したことは、確かに佛教の優秀を示すものであります。他のものはそれから見たならば、洵にまどろっこい不徹底のものである、この宇宙の倫理的因果法が大規律として儼然と存じ、佛と雖も神と雖もこれに反することが出来ないといふことを、法華經に説かれてあるは、いかに進歩せる思想であるか、いかに文化的色彩を

奪びて居るか、眞に東洋然り日本の誇りとすべきことであります。

今一つはこの宇宙の實相を根據にするのでありますが、この宇宙は何であるかといふと、即ち圓慈觀と稱すべきものであります。西洋の文明が墮落して來る原因は、唯物的宇宙觀であつて、宇宙には温かき力のあることを見ない、人間が一番偉いもので、人本主義である、人の力に依つて宇宙を開拓すべきものである、天上にある日でも月でも、アンナものは網でも懸けて引卸して來ることが出来るやうにいつて、人間の力を萬能と見て、宇宙には何物も恐るゝものはないといふことを考へて居る、それが爲に物質的には進歩であるけれども、精神的には大墮落を始めて居るのである、そこに倫理はありません。西洋のやうに人間の力を無限に過重視して來た時に於ては、唯だ慢心のみあつて我慾を増長し、そこに現はるゝものは甚だ悲しむべき状態である。併し西洋人の間にも曲りなりにも基督教の神が權威を有ち、そこに愛の宇宙觀が行はれて居つたならば、彼等の罪惡も行はれなかつたらうけれども、基督教は盛んなやうに見えても形式に墮して實質は權威を失つて、而して唯物的宇宙觀が勢力を得て居るが故に、人心は滔々として墮落するのであります。

佛教は圓慈觀といふものを、非常にしつかりした哲學的根據から説明をして居ります。圓慈觀がどういふものであるかといふことは、今此處で説明する時間がありません。それは大藏經要義第三卷の涅槃經の問題として詳細に説明して置きましたから往見されたい。圓慈觀といはれて間違つて、眞如々々といつて居るやうなツンナ冷たい宇宙觀では倫理も何も出て來ない、眞如法性といふものの中には迷も悟もなく、自他の行相も無し、坦然平等の海ぢやといふやうになつてしまふ、善も惡もない、邪も正もない渾然たるものが絶對である、落行く先はそこだ、善人も惡人も皆最後は輪が腐つたやうな所に落ち着くものだ、一切は平等だ……といふやうなことをいつて、それが法性的宇宙觀として今迄勢力を得て居た、だから坊主が墮落するのも決して坊主自身が悪いのぢやない、その思想が災ひして居る。人はひとりでに腐るものぢやない、先づ教化が腐り、主義が腐つて而して後に人が腐るものなのであります。彼等は

慢心をして居る、法性海の中には自他の行性なし、生佛の假名を絶すと云ふから、佛とか衆生とかいふのは假りの名前だ、それは區別してはいけない。本當にいへば佛も衆生も同じだといふことになりまから、これ程の慢心はない。さういふ亂暴な所に止まるやうでは、到底修行も倫理も立たない、圓慈觀を根據にしなければ駄目であります。圓慈觀を根據にすれば、どうして倫理が発生するかといふと、始終温か味に包まれて居るからして、恰度善き父母の膝下に養はれた子供は願良なる人格を作るやうに、日本の如き仁慈の 御皇室を戴いて居る國民には善良なる民風が興るが如きものであつて、宇宙は常に圓慈の風に包まれて居るといふ思想に立つ時、人は初めて向上を始めるのであります。宇宙は冷やかなるもの、冷酷なるもの、何の尊敬を拂ふ價値なきものとしたる時、人は滔々として墮落を始めるのであります。

それから今一つは、佛を信することを本にして倫理を説くのであります。佛を信することに依つて人間の倫理性が導かれるといふことは、これは宗教の信仰は不思議なもので、人間の直心といひますか、眞心といひますか、非常に初心なる、天真爛漫なるものを導き來るのである、この心が一たび發生する時、至誠一たび開けば何事か成らざらんやであります。「心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と軍人勅諭にもある、一切の道徳はこの誠を本にしなればなりませぬ。一つの誠心は絶對の佛を信する時に感孚して、人間固有の佛性といふか、直心といふか、眞心といふか、偉大なる靈力を有するものが豁然として現はれる、一旦豁然としてこの信仰の境界に達する時に於ては、實に無限の大勇を現はして、何事か成らざらんと云ふ大活力を活現して來る、そこに倫理が現はれて來るのであります。

先づその他にもありませんが、この心を本にして倫理の根據を認め、因果法を本にして倫理の根柢を十分にし、宇宙の圓慈觀を本にし、又佛陀の慈悲に感孚したる信念を本にして説くことが、佛教の倫理觀の根據であります。而してこの信仰を根據にせざる道徳は彩色に膠の無きが如しといふことになるのであります。

更に佛教の倫理の應用といひますか、それが實際に働いて行く場合はどういふ有様かといふと、無論これは調和的

の傾向を取つたものであります。中庸に所謂「大徳は教化す」といふやうな意味で一切を具へて居る、信仰であるとか、真心であるとか、或は因果法といふものは、有らゆる行爲を包括して居るものである、併しそれから導かれて流れて出る所の行爲がどうなるかといふと、矢張り「小徳は川流す」で、小さな徳は川の流れて悖らざるが如くに、有ゆる倫理が調和を保つて行く、これは東洋思想の共通點であります。儒教に於ても今引いたやうに「大徳は教化し小徳は川流す」と説いて居るし、日本の道徳觀も實はさうである。佛敎はやはり東洋的色彩を帯びて居るものでありますから、調和を取つて居る、その調和を取ることには非常に巧妙なものであつて、今日いはれて居る所の人格完成から起つて、さうして家庭の道徳、社會の道徳、國家の道徳、人類の道徳、宇宙の道徳、一切を大調和主義に依つて包括して居るものである、故にその一點を擧げて一人の信仰を説くが如くであつても、決してそれは獨善主義ではない、へまな倫理學者は、佛敎は己れの意を淨うし、己れの罪を免れたい、己れが極樂往生をしたいといふやうに、初めから終ひまで己れ々々で、全く個人的獨善的の道徳である、社會性を帯びない、國家性を帯びない所の洵に貧弱なるものであるといつて嘲つたが、何ぞ知らん、佛敎は左様なへまなものではない、彼等こそ社會性といへば唯だ社會の一面のみを見て國家を輕んじ、國家性といへば國家が鼻について人道に引かゝる、人道主義といへば國家が邪魔になるといふやうな工合で、彼方へがたがた、此方へがたがたと態は無いものである、どうしても佛敎が世に現はれなければ、人類の文明は歸結する所はないのである。彼等はモウ實に右往左往、彷徨して居る所の所謂迷へる羊である、實に哀れなものである、それを愚にして覺らず文明と稱して居る。釋尊はこれを即ち凡夫と爲し、これを暗黒の世といふのである、五濁爛漫の世である、成つてゐない。

佛敎は個人の人格よりして、今申す通り宇宙法にまで繋がつて居るといふことは、洵に明白なことで、人心を本にして四恩六恩を説くといふことを考へても、直ぐ分ることでありますが、併しそれだけ位のことぢやない、一切の佛敎の説明は、今私がいふが如き調節的のものである、世間で考へてゐるやうなソナ切ればしの唯一つのものぢやない、七千餘卷の經卷は鬱然として今いふが如き世の有ゆる倫理を説いてある、或る時は個人の完成を説き、或る時は家庭の道徳を説き、或る時は社會の調和を説き、或る時は國家を説き、或る時は宇宙法を説き、縱横自在、圓満珠の如きものであります。縱横無盡に説いたもので、それが本當である、一つ宛見るのは詰らない、釋尊は皆それを調和して説明せられたものである、それが本當の佛敎であります。私はそれに就ては阿含經等に於てもその事を立證して置いたのであります。一々は此處に紹介することが出来ぬけれども、その説明の順序だけ申して置くならば、大藏經要義卷五、阿含經大觀の下に於て、得益に關する教義として、阿含が世に行はれた時には、いかなる結果を人生に齎すかといふことを示したる場合に、先づこれを廣く國家の方面から見、その上の効果を第一に列擧し、第二には社會全體に對して列擧し、又その間に於ては、國と國との國際法の關係に就て、そこに道徳的の教訓があり、それから家庭に就て見、それからこれを個人の人格に就て見、有ゆる方面から見、阿含の教だけに依つても、佛敎の倫理が斯の如く鬱然たるものであるといふことを紹介して置きました。今猶「阿含經は五戒を説き、梵網經には十戒を説く」といふやうなことをいつて居るのは、隨分舊いあたまである、長阿含には何を説いたとか、増一阿含には何を説いたとかいつて、六道の因果を明かすとか、戒・定・慧を現はすとかいふが、ア、いふことはどのお經にも説いてあるので、そんな事は天台大師がいふたか、いはぬかも分らぬ、天台大師がまさかア、いふことはいふまいと思ひますが、天台のいつたといふ言葉で残つて居つても、事實は間違ひがあらうと思ひます。私は天台のいふ事は間違ひないと思つて、最初は四阿含經の大體さういふものかと思つて居つたが、能く見て行くとまるで當にならぬ、だからこの道徳觀ナンといふものは、昔の坊さんは考察點が分らぬ、佛敎の倫理ナンといふものは考察點がない、それは世間の儒敎や何かといふことである、佛敎は矢張り涅槃の道であるといふやうなことを、あたりに置いてやつたのが間違ひの本であると思ひます。釋迦牟尼世尊は今の所謂宗教を聞いたものにあらずして、廣く文化の全體に對して批判を與へ、指導を與へた所の達人であると思ふのであります。

大體に於て報恩主義の道德觀といふものは、非常に強い力が現はれて居ります。心地觀經、大薩遮經に現はれて居るばかりでなく、阿含全部が報恩主義であります。釋尊が常にいふ言葉は、『小恩なほ報ず、何に況んや大恩をや』といふ二句で、これは釋尊の演題として何時でもお説きになつた事でありました。人は小さな恩を受けてもそれを忘れてはならない、況んや大恩をや。然らばその大恩とは——といふに、親の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩、師匠の恩、夫婦の恩といふやうに、或は十恩を數へて居ることもありすが、原則は『小恩なほ報ず、何に況んや大恩をや』といふことが佛教の原則である。その例には狐の話が出て居る、これは印度にアアいふ傳説があつたと見えて、狐が體に痒がりが出て来て、冬の夜に啼くといふ、さうすると村の者が皆飛び出して、我先にとその狐を捕へて来て、藥を體に塗つてやる、その爲に狐の毒ひ合をする、それはどういふ譯かといふと、その藥を塗つてやつて痒がりか癒ると、その代りに思ひも染めぬ好い物を狐が呉れるといふ、どういふ幸福を持つて來るか分らぬ、夜中に千兩箱が舞込むか、或は平素ほしい／＼と思つてゐたものが手に入るか、兎も角も容易ならざる幸福が舞込むといふ、だから狐が啼くと飛んで出て村の若い者がその爲に喧嘩をするといふ、さういふことがある。それを釋尊が引例して、お前等が狐が啼くと飛んで出て藥を塗るといふのは、それは何に基くか、狐のやうなものでも病を癒して貰つたならば、その恩に報ゆる爲に必ずや幸福を持ち來すといふことを信するが故に、狐を取りやりするのであらう、然らば禽獸すら恩を報ずるといふことを、お前等は知つて居るぢやないか、況んや人間に於てをや、と毎時も説法して居られます。非常に面白い、さういふやうな所は、佛教の倫理觀の有力な方面であります、實は東洋文明、西洋文明の決戦點が此處にあると思ひます。西洋の自我主義の道德と、東洋の報恩主義の道德とが、東西文化の決戦點に現はれて居る、この文化の決戦に對して夫れ々々學問のある人は、大に研究を積まれてこの佛教の倫理の眞價、東洋文化の權威を全世界に發揚するやうに努力せられんことを切に希望する次第であります。

優婆塞戒經要解 (其九)

本多日生

淨戒品第十五

人あつて是の如き戒を受持し已つて、云何にしてか當に是の戒を淨からしむべきや。佛の言はく、善男子よ、三法あり能く是の戒を淨む。一には佛法僧を信じ、二には深く因果を信じ、三には心を解せよ。

この淨戒品は戒を受け終つて以後に於て、その戒法を實行する、その道德行爲に生氣あらしむる爲に、教訓を與へられたのであります。戒を淨めるといふのは、戒が濁り戒が死ぬといふことがあつてはいかぬ。多く律法は固陋になり形式に流れ、爲に生氣を喪ひ精神を失ふからして、さういふ事のないやうにすることを説かれたのであります。故に此の品の前文には種々なる注意が説かれて居るので、此處に抽出したのはその中の一節に過ぎないのであります。この處は三つの事柄に就て、戒律に生氣あらしめようとするので、第一は三寶に對する信念を大切にして行くことに於て、その信仰の力が戒律に加はれば、戒をしていつも生氣を有せしめる。唯だ戒の形式を覚えて、冬の寒いのに單衣を着て居らねばならぬといふやうな事を墨守して居つたならば何の爲か解らない、律宗など多くは形式に流れて信仰の生氣が無くなつて居る。茲には第一にその事がいつてある、いかにして淨からしむべきやといふことは、前に

いふ通り生氣あらしむることゝ見た方が能く分ります。第二には「深く因果を信じ」即ち道德行爲に因果律の行はれて居ることを確信する。近代思想に於ては、物質界には原因結果の法則が行はれて居るを信するけれども、道德行爲に於ては因果律のあることを信じない。佛教の現はれる以前、印度の婆羅門教が、矢張り善惡の標準を神の胸三寸でどちらにでも成るやうに説明して居つたが、それをお釋迦様が破つて、決して神の任意に依るものに非らずして、行爲そのものに於て善因果の法則が行はれる、それを信じない者は邪道であるといふ事を説かれた。是は己れの爲しつゝある行爲に於て必ずやその結果の來るを信するが故に、惡を戒める上に於ても、縦し法律を免れても、社會の制裁を免れても、又人が之を免じても、惡なるものは必ずこの宇宙に存する道德的の大紀律に依つて、制裁を受けるものであるといふ事を確信する時、そこに非常に立派な力が出て來るのである。人間の制裁とか、法律の制裁とか、社會の制裁とか、或は内制裁といつて居るけれども、唯だ内制裁といつても自己の良心は時に甚だ曖昧なもので、吾身勝手の判斷を下すけれども、縦し自らはそれを是認しても、宇宙には更に神聖にして森嚴なる理法がある。故に自惚れた根性では是認した行爲も、眞實惡であるならば、その結果は必ず惡結果を來たすを免れない。縦し社會が認めずと雖も、人が反對しようとも、眞にその事が善であるならば、必ずや善果がある。この意味に於て道を信する精神の基礎をこの道德的因果法に置いたのであります。この事を強く信じて居れば、己が戒律の善を行ふ時に力があるのであります。人が見て居らうと居らなからうと、そこに正義を維持することが出來ます。

第三には「心を解せよ」自己の心の眞實を領解するならば、他の言葉を以ていへば、人の性を領解することが正確であつたならば、それに依つて善を行ふに力が現はれるのである。儒教でいへば明德の説である、人の性そのものゝ典には、非常に立派な明德がある、惡い事をしたりするのは、己のその心の光が曇つて居るのである、自分の眞心が發現したならば、それは必ず善を爲し得るのである。善を爲すに困難なやうな感じの伴ふは、既に曇りが掛つて居るのであるといふ風にして、所謂反省力を養成することが出來るのである。西洋人の思想を支配して居る所の心の解釋

は確かに間違つて居る。人間の心といふものは自利心である、利他とか犠牲といふのは虚偽である、偽らざる自己は自利のみであるといふやうな事をいつて、心を解釋することに於て根本に誤解を有つて居る。又人間は進化學の法則からして、動物から進化したものである、色々の事情に依つて飾り立てたが故に、今日のやうな精神になつて居るけれども、元々動物であるが故に、自利心が本能であつて、それが少し進んだ所でも自分の仲間を可愛がるが、他の者は排斥する、恰度餘所の町の犬がやつて來るとやつ付けるといふやうな風で、愛國心といふものは、犬がそこに一緒に居るものは仲善くして居るが、他から來たものを食ひ殺すやうなものであるといつて居る。さういふやうな風に、人間の價值を絶対に認めず、それが爲に不都合な事があつても當り前である、道德行爲などは偽つたものである、正直に赤裸々に、謂はゞ素つ裸で動物行爲をするのが、それが人間の本性であるといつて居る。所が近來氣が付いて、第四本能といつて、人間には社會性があつて共生存の精神を有して居る、故に自分の爲ばかりを計つて居つてはいかぬといふ事を發見したのが、新しい思想でそれが一方には危險主義者をして勢力を得せしむる原因となつた位であります。さういふ事を今頃發見したとかせぬとか議論するのは魯鈍なものであります。併しながら多くの者はそれが眞理であるかの如く思ひ、人間といふものは寧ろ自利心であるといふやうに信じて、人間に佛性のあるといふやうな事は駄目だ、消極的だといふやうに滔々として惡風潮を作つた。そこでこの經文は、今日の如く道德は頽廢し、人心は腐敗する結果になるといふ事を教へて居るのであります。「心を解せよ」といふのは即ち心の光明を發見せよといふことでもあります。

この三點は實に簡潔なる文章でありますが、三寶に對する信仰と、道德的の因果律と、心の光明とを領解してかゝれば、立派に戒律を行ふ上に於て何時も生氣發射として保持することが出來るといふことを説かれて居ります。

尙ほ茲に一言を要することは、この佛教の教へる所の戒律に就て「間違」といふことを領解しなければならぬのである。「聞」は開發といふやうなことで、一の律法から他の律法を新たに生み出す場合をいふのである。「造」は造止

の意で、今迄ありし律法でも不用に屬するものは之を廢止してしまふこととあります。佛法の戒律には、在來の律法と雖も廢止すべき時期に達したならば、之を捨て去るべしといふことがある。この開造を領解しないと、風俗人情等の非常に變化したる今日に、三千年前の律法をそのままに持つて來て、之に服従せしめんとするから隨分そこにおかした事が起つて來るのである。この思想は大涅槃經にも論ぜられて居るし、その他一切經を見ますれば、元々戒を作する時に於ては必ずしも永遠の必要はなくとも、その場合々々の必要に依つて制定せらるゝことが多いのであります。即ちその部落に依つて各々異つた弊害がある、或る部落の者は非常に行儀が悪くて、路傍で無闇に小便をする、そこで路傍に小便をしてはいけないといふ律法が現はれるのですが、行儀の良い部落に行つて、路傍で小便してはいけないといへば「そんな事は仰つしやらなくても知つて居ります」といふことになる。色々地方改良といふやうな事を考へますると、どうしても定めなければならぬことが起つて來る。又多くの人を集めてそれを訓誡して行く上にも、どうも朝寝の奴が多くて時間が遅れるといふことになれば、その時間を嚴守せよといふ事が非常に強い力で現れて來る。大體に就て支那、日本に來て居る佛教の中には、この開造といふ事を殆んど忘れて居つたのであります。日本の佛教徒が佛教の戒律を論ずる場合には、古い時に定まつたものを以て論じて居つたのであります。却て暹羅邊りに傳つた佛教に於ては、今日も開造といふ事はよく心得て、始終その變更を圖つて來て居ります、向ふの方が餘程進歩して居るのであります。

戒律の開造を心得て居るのは、南方佛教の緬甸、暹羅、セイロン等では等に傳つて居る佛教は寧ろさういふ點は進歩して居るのであります。所が北方佛教と稱する方の西藏、蒙古、滿洲、支那、日本等に傳つた所の佛教は開造といふことを知らぬ。戒律は非常に大切なものであります。この開造といふ事を心得て置かなければなりません。近來道德上の議論でも、道德は進化すといふに就て争が起るのであります。この佛教とか或は道德の方面は、必ず世と共に進化しなければならぬものであります。所でこの開の字を佛教で使つて居るのは洵に面白いことで、舊來の思想

が發達して行くのであります。恰度子供が大人になるやうなものであります。身體も心も總て迷つて居るけさども、併ながら太郎なら太郎が矢張り大きくなつたのであつて、決して別な者ではないのであります。その如くに、道德といふものも發達はするけれども、決して別なものになるのではない、一方には變化しない所の一貫したる體道が存する、さうして他の一方には必要に應じて變化して行く所の用道がある。用道は變化するけれども、體道は萬古不動のものであります。今の道德を論ずる人は、道德は進化するといへば、全部進化して前の道德を破壊してしまつて、別に何か出て來るのだらうといふやうに考へて居るのは馬鹿者である。さうかと思ふと道德は變らぬものであるといつて、頗る固陋のことをいふやうになる。我が建國以來の精神は變らぬけれども、それに肉がつき衣を着て發達して來たのであるから、我國に今日迄開發せられ扶植せられたる凡ゆる道德が調和されて、儒教の中から來た精神も、佛教から來た精神も、皆悉く我國の道德であります。而して變らぬものがこの中心を貫いて行くのである。それがこの開造といふことに就て領解すべき要諦であります。

夫れ以れば持戒は父母・師僧・國王・主君・一切衆生・三寶の恩を報ぜんが爲なり。父母は養育の恩深し。一切衆生は互に相助くる恩重し。國王は王法を以て世を治むれば自他安穩なり、此の修善に依つて恩重し。主君も亦彼恩を蒙りて父母・妻子・眷屬・所従・牛馬等を養ふ、設ひ爾らずと雖も一身を顧みる等の恩是れ重し。師は亦邪道を閉ぢて正道に趣かしむる等の恩是れ深し。佛恩は言ふに及ばず。是の如く無量の恩分あり。而るに二乗は此等の報恩皆缺けたり。故に一念も二乗の心を起すは、十惡・五逆に過ぎたり。一念も菩薩の心を起すは、一切諸佛の後心の功德を起せるなり。

一日靈聖人因果抄一

開目鈔講話

(承前)

小林一郎

一四

建仁年中に法然、大日の二人出来して、念佛宗禪宗を興行す。法然云、法華經は末法に入ては、未有一人得者千中無一等云々大日云、教外別傳等云々。此兩義國土に充滿せり。天台眞言の學者等、念佛禪の檀那を諷い怖る事、犬の主に尾をふり、鼠の猫を怕るるが如し。建仁年中に念佛を弘めるところの法然とか禪を弘めるところの大日とかいふやうな人が出て来て、さうして念佛宗、禪宗を興した。法然上人が撰集といふものの中に、世が末法の世に及べば、モウ難かしい教を研究しようと思つても、人の機根がそれ程でないのだから、たゞ阿彌陀様を念じて極樂に往生することを求めるより外ないといふことを熱心に説いた。法華經ナンといふものは

末法の世に入つては役に立たない、「未だ一人も得る者は有らず」得るといふのは自分が佛の境界に到達したいと思つても、その望みを達し得る者がない。又千人中一人も法華のやうな難かしい經を學んで覺るといふものはありはしない。經典そのものが難かしいのだから、逆も世の中の忙しい時代に商賣の片手間、世の中の仕事をすする病つた暇などでやつても解りはしない。解らなければ覺れはしないから、千人の中の一人たりとも法華經のやうな難かしい教を信じて、覺りを得る者はない。斯ういふことを言つてある、「千中無一」千人の中に一人もない。斯う言つて法華經を信ずることを止めてしまつて、さうしてそんならどうしたら宜いかと言へば、阿彌陀佛を念じて往生極樂を求めるより外ないといふことを説きまして所謂淨土宗といふものを興して、この淨土宗が日本國をもうスツカリ從へるやうな大變な勢ひになつたのであります。

併しこれは前にもあつたことでありますが、世が末になつて人間の機根が悪くなるか善くなるか、これが根本の問題であります。これは法然が偉いか日蓮が偉いかといふそんな問題ではない。お互考へて見なければならぬ。だん／＼世が末になつて忙しくなつた時に、人間は難かしい事を考へられないやうなものになるのか、それとも本當のことでなければ信ぜられないといふ風に機根が善くなるのかどつちだ、法然上人のやうに、世の中が忙しくなれば機根が悪くなる、モウ毎日の生活で一パイだから、本當の事を考へる暇はないと言ふ。天台・傳教・日蓮等の主張に依れば、さうではない、世が末になつて来ると本當の教でなければ弘まらなと言ふ。斯ういふ二つの教といふものは兩立しないものであります。どつちが本當だか、お互自分の家の宗旨ナンといふことに執はれないで、眞面目にこれは考へて見なければならぬ問題であります。一體吾々はどつちだか、人の事は措いて、吾々は機根が悪くなつて居るのか、善くなつて居るのか、この事を眞面目に考へて見なければならぬ。成程世の中が忙しいといふと、宗教のことなどは深く考へる暇はないといふことも一通り尤であります。併し世の中が忙しくなると人間が批判的になるといふことも考へなければならぬ。いろ／＼な事を見たり聞いたりしますから、大

概の事は成程と思はないやうになる。例へばいろ／＼な薬を服んで居ると大概な薬は利かない。餘程良い薬でもたんと利かない。滿洲や朝鮮へ行つて薬を一度も服んだことのないやうな人に服ませると、葛根湯ぐらゐのものでも立派に利くさうであります。始終良い薬を服んで居ると大概な薬では駄目です。餘程良い薬でなければ利かない。今の日本のやうにいろ／＼な思想が行はれて、一方國體明徴主義と言へば、一方はマルクス主義とかいろ／＼なことを聞かされますと、どれがどれやら解らなくなつて、マア大概似たものだナ。斯う思ふやうになる。さういふ時こそは人の心に本當に沁み入るやうな眞實の教を以てこれを解決するより外ない、いゝ加減な教では能く似たものが澤山あるから、どれも同じことになつてしまふ。世が末になつて人の機根が下るといふ筈はありませぬ。社會が複雑になればなる程人間は批判的になるから、大概な教では受付けられないやうになる。ハ、アそんなものか、似たものだナと斯う思ふやうになる。現に吾々青年を相手にしてもさうです。大概な事を言つたのでは受付けはしない。お前達朝早く起きて冷たい水で顔を洗つて、冷水摩擦をして、神棚を掃除して、庭に水を撒いて、掌を合はせて拜んで……と言つてもそんなことは聽かないでも解つて居ると言ふ。解つて居ると言つても

やりはしない、寝て居る。今の激しい時代に人を捉まへて簡単な教を説いても聞きはしない、てんで受け付けない。世が末になつて来るとだん／＼人間が批評的になつて、實行はしないで人の批評だけするやうになる。さういふ時にはどんな疑問を持つて来てもどんな問題を持つて来ても直ちに解いて呉れるやうなしつかりした根柢を有つて居る教でない、この忙しい時代の人をへ、ア成程と思はせることは出来ないであります。だから世が末になつて来て人の根柢が下るから易しい教が宜いといふことは世の中の實際の有様を知らない人の議論でありまして、斯ういふどうも激しい世の中になつて来ると、餘程善い教でなければ世間に行はれない。それで本當に天台・傳教が言はれたやうに、斯の如く末法の世になつて、世の中が差迫つて来た時こそは、佛様の魂を打込んで説かれた教、どんな疑問にも答へることが出来るやうな、どんな問題でも解決出来るやうな教でなければ、一切の人を信ぜしめるといふことは難かしい。これは本當だらうと思ひます。私は自分が法華經が好きだからといつて、自分の好きな方の扇を持つて言ふのではない、實際世の中を見ますとさうであります。いゝ加減な教ではなかなか人は言ふことを肯かない。一時は流行るかも知れませぬ。けれどもいゝ加減な教では永久の生命といふものは

あるものではありません。それで世の中が末になつて来ると法華經のやうなものを信ずるのはつまらないといふ議論は、これは所謂目前流の議論であります。チヨツと見るとさういふやうにも考へられますけれども、本當に考へて見れば、この複雑な時代を救ふにはやはりしつかりした根柢を有つて居る教でなければならぬ。斯ういふことを考へなければならぬのであります。

それから又禪宗の方では教外別傳といふことを申しまゝ、大日といふ人はこれはよく芝居などに出て来る悪七兵衛景清といふ平家方の武士の叔父さんに當る人でありまゝ。早くから天台宗の坊さんであつて、後に禪宗の事を研究して、自ら禪を弘めて世の中に立つた。日本に禪宗の弘まることの初めであります。奈良朝、平安朝の頃に禪宗の教義といふものが日本に傳はつたこともあるけれども、これは世の中に弘まらないうでその儘で終つた。實際世の中の人を相手にして禪を説いたのはこの大日といふ人が初めだと言はれて居る。併しこの人は大して力もないし、徳も高くなかつた人でありまゝから、この人の力だけでは禪はあまり弘まらなかつた。その後に至つて榮西とか道元といふ人が、何れも優れた人で、支那に留學して、支那から禪宗の教義を傳へて来たので、榮西や道元の力に依つて禪といふものが鎌倉時代の半頃から

日本に弘まつた。日蓮上人の當時にはまだ榮西や道元の勢力が殆ど世の中に現れて居なかつた。この大日といふ人の仲間が僅に禪を傳へて居つたのであります。日蓮上人の御書の中には榮西や道元のことは一つもありません。その時分には榮西も道元も勢力がなかつた。日蓮上人はその當時世の中を動かして居る者を捉まへて批評されるのでありますから、その當時の禪宗といふものは大日の弘めた禪宗で、その大日の言つて居ることを批評されたのであります。

その大日といふ人は教外別傳といふやうなことを言つて禪宗を弘めた。教外別傳といふのは、お經の中に書かれて居ることは、お釋迦様の本當の心持を打明けられたものではない。本當の教といふものはモウ經典にも何にも書かれない。佛様の心持から直に自分達の心持に傳はるより外ない。斯ういふのが所謂教外別傳、普通の教より以外に別に傳へたものだ。斯う言ふそれはどうしたら宜いか、お釋迦様と吾々と時代が遠いから、お釋迦様にお眼に掛つて直接に聞く譯に行かないから、それはどうしたら宜いかといふことになる。そこでそれは人から人に傳へるのだ。お釋迦様が迦葉といふ弟子にお傳へになり、迦葉といふ弟子がそれを他の者に傳へ、それから又傳へ、してだん／＼傳へて達磨になつた。達磨は支那

へ来て慧可に傳へ、慧可は又自分の弟子に傳へ、今でもズツと傳へて居る。だからお經ばかりでは解らないから、お釋迦様から直に傳へて来た人のその精神を能く理解して、さうして初めてその教が解るので。今でも禪宗の方ではさういふやうに言ふたゞお經を讀んでもいけない、誰の思想を傳へて行くかといふその誰の思想を傳へるのはどうして傳へるか、それは坐禪をする、坐禪をして靜に考へて、さうしてその優れた人の教へた事を考へて、自分の心で覺れば、その人の教を傳へたことになる。坐禪をしなければならぬ。たゞお經を幾ら讀んでも仕様がなない。坐禪をして昔の人から人に傳へた教を自分の心で覺るので。それが教外別傳だ、斯う言ふのであります。だから吾々が法華經は最勝のものだと申しますと、そんな經典などを讀んでも駄目だ、坐禪をしなければ何もならぬ、何も覺る所がなくしてたゞ文句ばかり習つて居るのでは駄目だと言ふ。或は吾々はさうかも知れぬ。ところがその覺つたといふのはチト怪しい、地震が来ると慌て、駆け出して泥濘に落ちんだといふのも随分あるので、覺つたといふのも當てにならないが、マアさういふ教外別傳といふことを言ふのであります。

ところがさういふ議論はお釋迦様の仰しやつたことを無視したことであります。お釋迦様は法華經を説く時に、

この中に如來の全身在しますと仰しやつた。法華經を讀んで見ると、その中に佛様の全部がある。今自分が法華經を説いたのだから、この説いたことを眞面目に皆が解つて傳へて呉れよば、法華經が傳はるといふことが即ち佛が始終世の中に居るといふことナンであつて、この經の中に如來の全身があるのだから、それで皆が正しい信仰を持つて行けるのだ。斯う仰しやつた。然らばそのお釋迦様のお心持を理解した人が居ないか居るかといふとそれはお經を讀んで見ると、舍利弗でも或は迦葉でも解つて、さうしてお前は今の信仰を續けて行けば末に至つて佛の境界に到達出来るぞといふことをお釋迦様が許して居らつしやる、その人の思想がズツと傳はつて、支那の天台にも傳はり、日本の傳教にも傳はつて居るのでせう。さうすればその法華經といふものを眞面目に辨へて居る人ならば、縱ひ佛様から直接に聞かなくても、如來の全身の籠つて居るこの法華經を知ることによつて、直に佛の精神を傳へたものと見て差支へないことになる。

それを疑ふなら佛様をまるで疑ふことになる。それだからお經を讀んだのでは佛の精神が傳はらないといふことは、お釋迦様のお言葉とは違ふ。併しなからさういふ思想の出たのはその時の事情として已むを得ないことであります。兎角に人間といふものは執はれる所があるから、

文字を見ると文字に執はれて文字の説明をすればそれで宜いといふことになる。言葉を聽くと言葉に執はれて言葉が解ればそれで宜いといふことになるから、さういふ執はれることを打破る爲に、文字などを離れる、言葉などを捨てろといふことを強く説かれた時代があるといふこともこれも尤であります。

それだから「不立文字」文字を立てないといふやうなことを言つた人が出たのも無理はない。何故なら字ばかり講釋しても本當の事は解らない。字に執はれてはいけなしいといふことは字が役に立たぬといふことではない。字に執はれてはいけなしいのだが、字を讀んでそれからモツと深入りして學べば字といふものは役に立つ、そこに止まつてはいけなしい。固より文字で書き盡せるものでもなければ、言葉で言ひ盡せるものでもないから、そこで止まつてはいけなしい。併ながら文字を見ず、言葉を聽かなければ深く工夫して言葉にも言へない所を覺れば宜い。さういふ意味から言へば文字といふものは決して役に立たぬものではない。禪宗の方の坊さんでも白隠といふ人がこの人は法華經を熱心に讀んだ人であるが、皮肉なことを言つて居る、不立文字といふことを言ふが、不立文字と

いふこともやはり文字ぢやないか、若し文字がいけないといふなら、不立文字といふこともいけないといふことになる。字がいけないのではない、字に執はれるのがいけない。字よりモツと深入りすれば宜しい。そこを知らない。華經だの阿彌陀經だの大日經だの、そんなものは一切要らない、たゞ坐禪して覺るのだと言ふ人が、不立文字だ、教外別傳と言つてそれこそ言葉に執はれて居る。言葉に執はれない」と言ふ人がやはり言葉に執はれて居る。つまらぬことであります。

その事を日蓮上人が指摘されました。どうも大日ナンといふ連中が兎角に教外別傳ナンといふことを言つて居る。さういふやうなお釋迦様を無視して、お釋迦様の魂を打込んでお説きになつた法華經を無視するやうな教がこの國に一パイになつて居る。それでさういふやうに世の中に念佛とかいふものが流行つて來ると、念佛を主張する者は念佛を勧め、禪を信する人は禪を勧める方ばかりして居る、さうして世間の大勢の人がその方に靡いて來ると、天台宗だの眞言宗だのといふ連中がやはり世間の流行を追うて、念佛も宜しうございます、禪も宜しうございます。斯ういふやうなことを言つて來る。これがどうもマア大変な累ひになる。「天台眞言の學者等、念佛禪の權那を説い怖る事、大の主に尾をふり、鼠、猫を怖

るゝが如し」兎に角お寺といふものば檀家がなければ立ち行かない、例へば天台宗の檀家が念佛を習つて見て「この間念佛を習つて見たが本當に有難いと思ひましたがどうでございませうか」と言ふと、坊さんはそれははいけなしいと言へば檀家を一ツ無くするから「それは結構であります。マア天台宗も大概同じであります」と言つて、いゝ加減にして置く。又眞言の檀家が禪宗を習つて「この間禪を聽いたら大変結構だと思ひました」「あゝ、それも結構です。禪もこつちも同じですから、それも宜しうございませう」斯う云つて檀家を逃がさないやうにする。それだから滅茶々になつてしまふ。甚だ悪口を言ふやうですが、今でも坊さんにはさういふ氣味がある。檀家を失つては大變だから檀家が何か言つて來ると「宜しうございませう」「御尤でございます」と言ふ。それでは教といふものの權威が無くなつてしまふ。それは古今とも同じであります。

徳川時代に綱吉といふ將軍があつて、自分が戌の年だからといふので犬を大變可愛がり、犬を殺すことを禁じた。その時に綱吉、歸依を得た隆光といふ坊さんがある。それに「どうだらう、宜いだらうか」「イヤ、洵に結構でございます。人間が動物を恐れむといふことは洵に結構です、將軍様の御仁慈洵に有難いことにございま

す」と言つた。それから綱吉が死んで次の將軍が立つた時に、今度は政治の改革があつて、犬を救ふといふことも宜いけれども、犬を怪我をさせた爲に人間がどうも罰を受けるといふことは困る。だから犬を怒れむといふことはやめた方が宜いといふことになつて、それから隆光といふ坊さんの弟子に聞いた「今まで犬を怒れむといふことになつて居つたのだが、だん／＼詮議の結果、犬より人間の方が大事だから、人間を損ふことをするくらゐなら、犬を怒れむことをやめた方が宜いと思ふがどうだらう」結構でございます。過つて改むるに憚ること勿れ、間違つたと思つたら直す方が宜いと思つて居る。斯う言つて居る。どつちでも宜い、檀家を逃がさない。こんな馬鹿々々しい話がありますが、これは昔ばかりのことではない、いつの時代でもさうです。自分の宗の繁昌、自分の寺の繁昌ばかり考へて行く、それを日蓮上人が攻撃をして、どうも眞言だの天台だの言つても、檀家が念佛が善いと云へばそれも宜いと思つて、檀家が檀家が善いと云ふと、禪も宜いと思つて、檀家が檀家を怖れることは大變なものである。犬が主人に物を貢ふ爲に尾を振るやうなものであり、鼠が猫を怖れるやうなものだ。それだから教といふものが立たない。教を弘める人が歸依する檀家の御機嫌ばかり取つて居つ

て何が出来るものではないといふことを厳しく言はれるのであります。これはどうも實に尤であります。

國王將軍に宮仕ひ、破佛法の因縁、破國の因縁を能く説き能く語る也。天台眞言の學者等、今生には餓鬼道に墮ち、後生には阿鼻を招くべし。設ひ山林にまじわつて一念三千の觀を凝すとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を知らず、攝折の二門を辨へずば、いかでか生死を離るべき。

身分のある人の御機嫌を取つて、さうして佛法を破るやうなことでも結構だと賛成して居る、或は國を破る、國に正しい教が行はなければ國は榮えて行かないのでありますから、間違つた教を世に弘めるといふことはやはり結局國を破る本になるのだ。さういふことも構はないで勢力ある人がそれに歸依すると皆賛成する。斯ういふことになつて来る。

チョツト序だから茲に注意したいのは、こゝに「國王將軍」とあるその國王といふ言葉の意味であります。

これは時々日蓮上人の御本尊などの非難にもこの問題が絡まつて來るのであります。日蓮上人の御書の中にも國王はつまらぬ者だといふやうなこともありませうから、どうも日本國民と生れて皇室に對して不敬な心持を有つて居るといふ非難もあります。一體佛教の中で國王といふ言葉は政權の中心になつて居る人のことです。今申すやうな非難をするのはお經を讀まない人です、たゞ文字に執はれて居る。お經の中に出て居る國王といふのは、いつでも政治の中心になつて居る人と言ふのです。天子様のことを申すのではないといふことは經典を讀んで見れば解ることでもあります。日蓮上人が國王の迷ひを覺まし、或は國王の難を怖れると言つたのは、いつでも日本國の政治の中心となつて居る者がその政權を利用して壓迫を加へられるのに負けるな。斯ういふ意味であります。

經典の中の言葉の用ひ方に依つたのであります。そこは能く經典を讀み、又御書を讀んで見れば精神の在る所は解るのであります。それを縁に經典も讀みもしないで、國王と書いてあるから天子様のことだ、國王はつまらぬナンといふことは皇室に對して非禮だ……そんな淺薄な非難をする者もあるのであります。これはつまらない事でありまして、能く御書を讀み、又經典を讀んで見れば解ること、日本國民として日本の天子様に對して批判

を加へるといふ心持があつてはならない。日蓮上人でも日本の天子様に對して批判を加へるといふことはしはしない。たゞ政治の中心となつて居る者がその政治の力を利用して正しい信仰を壓迫するといふ時にそれは間違つて居る、斯ういふ批判が加へられるのであります。そこをどうぞ思ひ遣ひのないやうに願ひたいと思ひます。動もすると言葉に執はれる、それは經典などをあまり讀んで居る人が少いものでありますから、國王と出て來ると直ぐに日本であれば國王は天子様と、斯う思はれるのでありますけれども、併し經典の意味はさうではない、政治の中心であります。國の主ナンといふ時には北條の事を言つて居る場合がありますから、これは精神を取つて行かなければならぬのであります。

國王將軍といふのはさういふ意味でありまして、國の政治の中心になつて居る人に諷つて自分達が世間から迫害を受けたいやうにしようと思ふから、そこで間違つた教も平氣で承認して、結局國を破るやうにもなるのである。それだからさういふやうな事をして居れば、天台宗眞言宗の者は、今生には餓鬼道に墮ち、後の世には無間地獄の罪を招くやうになるだらう。今生に餓鬼道に墮ちるといふことはこれはチョツト不思議であります。餓鬼といふのは食べる物がないことでもあります。日蓮上人

の精神から言へば、受くべからざるものを受けて、それで命を繋ぐのは、命を繋がないと同じことである。斯ういふ意味であります。だから間違つた事を言つて人から物を貰つて飯を食つて生きて居るのは、死んだと同じこととて、身だけ生きて居つて、精神は死んで居る。餓鬼道に墮ちるといふのはさういふ意味であります。だから紫の法衣を着て金襴の袈裟を掛けて美味い物を食つて居ても、萬一自分の言ふことが間違つて居て佛の精神に背いて生きて居るならば、それは死んで居る人です。生きて居る人とは言へない。それだから餓鬼道に墮ちるといふことを言つて居ります。マア今の世の中の相當な地位に在る偉い人で、どれ程餓鬼道に墮ちて居る人があるか判らない。これは随分激しい言葉であります。實際さうです。この世に生きて居ると言つても死んだやうな生き方をして居れば、後の世に行けば無間地獄に墮ちるといふことは當然のことである。斯ういふことを言はれて居ります。随分日蓮上人の言葉は激しい言葉であります。併しナニも遠慮する所はないのでありますから、自分の思ふ所をどん／＼言はれる。叡山や高野山に住んで居る人は皆餓鬼道に墮ちて居る。生きて居ると思つて居るけれども皆死んで居る、受くべからざるものを受けてそれで命を繋いで居るのだから、實は皆死んで居るのだ。さ

正しい教を弘めることをしないと云ふならば、幾ら習つても習つた甲斐のない奴だから「生死」といふ世間の凡夫の生活を離れることは出来ない。自分は覺つたつもりでもやはり凡夫だ。本當に覺つたら、世の中の間違つて居るのを懸れと思つて救ふといふ心持になる筈だ。それが出来ないのは凡夫だからである、大に覺つたつもりでもやはり凡夫の境界を離れることは出来ない。だから世間に諷ふのも悪いけれども、世間に愛想を盡かして、一人で山の中に這入つて修行して居るのも悪い。それならどうしたら宜いか、世間に立つて如何なる迫害にも屈せずして世間の人を救へ導く爲に力を盡すといふより外に途はない。斯ういふので日蓮上人の自分の態度を明かにして居る、兩方の間違ひを戒められて居る。今の時代でもさうであります。世間に順應して何でも流行を追うて居るのは愚かなこととありますが、世の中はつまらないと言つて引込んで部屋の内でも本ばかり読んで居るのも存在の意味はありはしない。如何なる迫害にも屈せず、困難にも屈せずして、世の中に立つて自分の信ずるところを飽迄貫いて行くといふことに依つて初めて信仰した意味があるのであります。古今共にその道全く同じこととあります。

ういふ意味で言つて居られるのであります。さういふやうな譯でありますから、たゞこの世で無事を求めるといふだけではいけない。斯うなつて来れば正しい信仰の上に立つて、この信仰を活かして世の中に弘めるといふことに力を盡さなければならぬのであつて、世間の人に媚び諛うて世の中に順應するといふことではいけない。さればと言つて世間を厭うて山の中に這入つて一人で學問をして居つたのでは、世の中を益することはいふことないから、それもいけない。世間に順應するといふこともいけないが、世間を離れて一人ですまして居るといふこともいけない。それだから「山林にまじわつて一念三千の觀を凝すとも」天台大師の一念三千といふやうなことを一人で坐つて研究して本ばかり読んで居たり、或は「空閑」靜かな所に居つて、「三密」といふのは眞言宗で言ふことで、身口意の三業と言つて、身に行ふこと、口に言ふこと、意に思ふこと、皆佛と一致する「三密の油をこぼさず」といふのは、用心して言ふことにも行ひにも過ちのないやうにして居ても、時機を知らず、接受折伏の二つの事を辨へないで、いかでか生死を免れることの出来るものではない。たゞ學問しても仕様がない。天台大師が斯う言つた、弘法大師が斯う言つた……理窟ばかり言つて見たつて、今の時代に及んでこの

新講座開設

人は何故宗教が必要なのか、佛教とはどんな教なのか、何故法華經が經王とせられるのか、信仰すればどうなるのか、とか或は又信仰はしたいが、譯が解らないから、どうすれば幸福な人生が展開するだらうか、未だ自分は若いのだから……等々思ふ人は是非此際知友誘合せて來聽さるべく、左の通り講座を開設した、これ大きな愛國運動なのだ。

手帳と鉛筆御持參。
一切無料。

日時 毎週土曜日午後二時—三時
講師 小林一郎先生

主催 財團 統一團
法人 統一團

本佛實在の宗教哲學 (廿二)

河合 陟 明

十六、個佛の開覺に於ける時間究盡の二面性(承前)

智者大師云く、(摩訶止觀三ノ一)

大涅槃經云、佛性有五種名、或名首楞嚴、或名般若、今非止非觀、或名爲止、或名爲觀、即是不思議止觀、通於不思議三德。復次止觀、各通三德者、止中有觀、觀中有止、如止息止、是止善、屬定門攝、即通三解脫、停止、是行善、屬觀門攝、即通般若、非止非觀、即通三法身、其義可見也。貫穿觀、是止善、定門攝、即通三解脫、觀達觀、是行善、觀門攝、即通般若、非觀觀、理攝、即通三法身、意亦可見。復次止觀、共通三德者、止息止、貫穿觀、皆從三所離得名、即通三解脫、停止止、觀達觀、皆從三能緣之智得名、即通三般若、非止非觀、皆名法性、即通三法身云云。

かく人生の目的が善にあるに應じて、如来の目的すなはち救済活動の目的もまた善に存せねばならぬ、果して然り、佛陀は壽量品において一言にこの消息を説いて云く、

以諸衆生、有種種性、種々欲、種々行、種々憶想分別故、欲令生諸善根、以若干因緣譬喻言辭、種々説法、所作佛事、未嘗暫廢一。

と。

しかもかくの如き善は、單に吾々の主觀的内面において承認せらるゝのみでなく、それは歴史的・社會的にその客觀的妥當性を要請しかつ實現するものでなければならぬ。こゝにカントの「たゞ善き意志より發する行爲のみが善で

ある」とか、義務のために義務をなす」とか、あるひは「汝の意志の格率が同時に普遍的律法の原理となり得る如く行爲せよ」といふ如き、いはゆる主觀的・形式的・嚴密主義的倫理より、一轉してヘーゲルの客觀的・具體的なる Rechts-philosophie 倫理學となり、こゝに家庭を論じ社會を論じ國家を論じ、もつて國家は倫理的理念の現實性なりといふ如き主張となり、さらに「歴史は自由の發展なり」といひ、「世界の歴史は世界の審判史なり」Die Weltgeschichte ist das Weltgericht といふ如き歴史哲學に發展せねばならぬ所以が存するのである。而してその自由とは實に深く、一たびこれを開闢しきたるとき、それは佛敎の涅槃であり解脫であり、いはゆる諸法何物か涅槃に向つて進まさる、一切諸法、豈不向於涅槃行也、我於今者、亦向彼行なるものであらねばならぬ。

之に反し今日のナチス世界觀が Mythos des Blutes 血の神話の名の下に、カントやフイヒテヤヘーゲル等の倫理上思想をも斥けて、單に無條件的にゲルマン民族至上の主張を高調し、自己ないしアリアン種族をもつて殆んど世界史上唯一の文化創造民族なりとし、「人類のプロメトイス」なりとし、かくてみづから、將來において、「唯だ一つの種族が支配的民族として、全世界の手段と方法をもつて、人類制覇の事業を委ねられる」と考ふる如きは、これ深き誤謬であり迷妄であり、ヨーロッパ文化の將來的危機は又實に今日においてすでにこゝにも胚胎してゐるのである。それは宗教との接觸面において特に著しきを見る。

しかしながら翻つてこれを連觀するとき、カント乃至ヘーゲル等の主張も一種の脆弱なる觀念論たるを免れず、それは實在の根本的考察において特に然り、云く萬物の本體たる物自體 Ding an sich は不可知なり、宇宙の目的たる神は單に要請 Postulat にとどまるといふ如き bodulus 根據なき浮動の哲學は、畢竟するに Solakenphilosophie 影像の哲學たるを免れず。はたまたその歴史に對する眼界は單に人間の範疇を出でず、況んや人間の歴史をもつて、直ちに神そのものの歴史となし、それは神がみづからさ迷ひ出でて再び自己自身に還るところの經歷なりとし、しかもそれをもつて又他面、神の恩寵による攝理史觀なりといふが如きは、これ世界史をあげて一箇の神なるものご自己遊戯 Selbstspiel となすところの戲論哲學に外ならず、神への歴史と神の歴史と、佛性向覺史と本佛統覺史と、眞如發展史と智願救済史との混淆、すなはち神と人間との Hybridphilosophie 混血兒の哲學たるを免れない。

これに反し、苟くも凡ての哲學的思惟の出發點たる人界の現實より始めて理性の徹底的推論を極め、據つてもつて

眞に形而上界における *strenge Wissenschaft* 嚴密科學として、すなはち眞の實在の學として、生命本有の根本哲學に達し、その生命の内容として、あるひはその體象二面として、こゝに無作にして無始なる十界常住といふ迷悟無量なる人格的存在の、實在と互具と縁起と感應を大觀する一大法界史觀に立ち、而してかくの如き無邊法界の一隅に位置する吾々人生の目的が、すなはち佛性の向覺・行善に存し佛果菩提の大覺涅槃に存するものであるゆゑ、此において吾々の善の實踐と向覺意志は、たゞに吾々の主觀の内面における性具十界としての範圍においてのみならず、はたまた單に外は人類の歴史と社會といふ範圍においてのみならず、實にさらに大いに無限なる時空法界に客觀的に實在する——しかもつひに最深の意味においてはこれも亦悉く我が一念の法界的大已心に内在するものたる——*visible and invisible, sinnlich und über sinnlich* 可見および不可見、感性的および超感性的なる、無始以來の現實的十界存在と、無盡の交渉を有し、その善惡・迷悟・眞妄・正邪に對し、いはゆる魔界と佛界に對し、無限の反撥と協力をなすべきもの否なしつなされつするものなることを知るべく、かくの如き廣大なる法界哲學の立場において、始めてかの天台止觀の十乘觀法といふ宗教實踐が、まさしく佛性の向覺・行善として展開されるものなることを知らねばならぬ。

しかもそれは原始佛教の根本教理と實踐初門が、大乘深遠の境界に高めかつ深められたるものであつて、實に悉く因果を以てせられてゐる。すなはちその向覺發展の段階は、苦集滅道といふ迷信二方向にわたる因果的四諦の理が、四弘誓願といふ大菩提心と結合し、否、四諦は直ちに四弘へと推移發展し、それがたゞ從迷至悟なる一實道に向つて、かつ己心内容即宇宙内容たる十界にわたり、その六道・二乘・菩薩・佛といふ價値的方向において、層々切々高まりなりといふその眞の *Erhaben* 自由眞の *Nirvana* 涅槃への道であるのである。而して這般の消息は、十乘觀法中の *Goitehidung* の道たると同時に、客觀的にはあらゆる *Kulturwvicklung* 文化發展の原則であり、しかもそれは同時に大乘菩薩行としての聖行・天行・梵行・嬰兒行・病行といふ涅槃の五行と相俟つて、現代の世界における大小・強弱・正邪・利鈍等、幾多の民族や種族や國家の群居するに對し、否その禍亂鬭争の現實に對して、それら好箇の適應性を賦與しかつ指示し、然り彼等の *struggle for existence* 生存競争といひ *survival of the fittest* 適者生存と

いひ *have's an I have not's* 有つものと有たざるものといひ *is or not to be* 食ふか食はれるかといふ如き正邪曲直幾多の思想と屍山血河の慘憺たる現實に對し、一箇絶大なる宗教的眞理の源泉より、全人類を包括し來つてしかもこれにおの／＼その適應性を與へつゝ且つさらに佛道無限の大向上を辿らしめんとする、民族生存原理であり、人類指導原理であらねばならぬ。法華玄義に云く、

思益有三十二大悲、華嚴云、不爲一人一國一界微塵人、乃爲法界衆生、發菩提心、如是發心、有二大勢力、如二師子吼、於二々法中、明識三通塞、如雪山中、備有毒草、亦有藥王、菩薩須知、如此心起、即是六道苦集、名爲三塞、如是心起、即是二乘道滅、名爲三通、又如是心起、是一乘苦集、名爲一塞、如是心起、是菩薩道滅、名爲一通、如是心起、名爲菩薩苦集、如是心起、名佛道滅、於苦集中、能知非道、通達佛道、能知佛道、起於空塞、了々無滯……如主兵寶、取舍得宜、強者殺之、弱者撫之、知生死過患、名爲一塞、即涅槃、名爲一通、煩惱亂、名爲一塞、即是菩提、名爲一通、始從外道四見、乃至四教四門、皆識三通塞、節々執着、即是塞、節々融妙、名爲一通、若不識諸法夷險、非但行法不前、亦亡去重寶一也

人類最大の重寶を我等は斷じて亡失してはならぬ。しからばその大寶とは何ぞや。今や佛果の開覺に論到せんとする予の教説は、必ずその前提たるべき佛性向覺の善内容として、それが單に個人的主觀の範圍にとゞまらざる、歴史的・社會的・國家民族的・世界人類の規模における善であり、否一層廣大に宇宙的範疇における善であることを論明すべく、特に眼前直下の活潑たる世界史的現實の問題を、予の佛性向覺といふ理念すなはち人生哲學にしかつ佛道實踐といふ菩薩行の立場の理念より、一言のもとに道破してみよう。

そも——皇國の天業恢弘は即ち大菩薩行としての天行である。しからば如何なるかこれ天行なる、また如何なるかこれ五行なる、云く、

觀三十法界寂滅、即坐如來座、名三人行、拔三九法界性相、故起悲、與一一法界樂、故起慈、即是梵行、柔和照三善性相、即同嬰兒、照三惡性相、即同病行、又照三善性相、即戒、寂照即定慧、即是聖行。當知一心照三十法界、即具三圓五行。

如何如來座、爲三人行、第一義天、實相妙理、諸佛所師、一切如來、同所棲息、文云、觀一切法空、不動不退、

亦不分別、上中下法、有爲無爲、實不實法、故如來座、即天行（法華支義四下）

といふ如き公平無私、至大至正の心境をさながらに我が皇室の大御心として、萬世一系の寶祚を以て臨みたまひ、天の益人たり大御實たる我等國民一億の赤子はもとより、さらに全人類に對し全民族に對し、これを悉く一視同仁のものとみなさなはしつゝ、八紘爲宇といふ大同胞觀のまに、あらゆる地上の萬民をして各々その處を得せしめんとしたまふ皇室の御仁慈はまさに人類の世界において、もとより純宗教的救済にはあらざるところの統治經綸道の方面においてではあるが、この方面において本佛大悲の圓慈と靈智とも代りたまふべきものであり、否一步を進めて、本佛無限の靈威靈徳の御現れたるべきものであり、その靈力を體現したまへるものであつて、その御天職は實に聚行・梵行・天行・ないし病・兒兩行なる大乘涅槃の五行を、人類生活の國家經綸的方面において世界的に總括し運用したまふべきものであらねばならぬ。

これに對しかのナチスドイツ及びワツシヨイタリ等が世界に對してなすところの民族生存權といふ立場と要求は、これを正當として認むるに吝なるべきものではなく、また彼等いはゆる全體主義的國家が——たとへばナチスとワツシヨとは民族と國家との關係が相對的なりとはいへ——犠牲や獻身や名譽等を最も價值高きものとして、國家民族的團結を要求し實現せんとするは、具體的善の實踐・具體的正義の實現として、聚行の一分なりといふことができけだし聚とは正なり、聚行とは正行なり——從つて又その國家意識をも勿論高價に評量すべきものであるが、然しながら彼等には更に大いに仰攀三玄根、俯扶弱衰、上求菩提、下化衆生といふ如き大悲四弘願の梵行を訓へねばならぬ。もし單に民族至上の觀念に走り、とくに自己民族の歴史と文化と行動とのみを絕對視せば、これもはや所謂 Gothic 神聖なる佛性の行にあらす、それはすでに自然本能的なる生物的生命としての血の狂暴性に墮し、いはゆる dämonisch 惡魔的なる魔界の一分に加はれるものであつて、他民族・他國家の福祉はこゝに脅かされざるを得ぬ。これ斷じて生命原理たる一切衆生悉有佛性の天則に適はず、五行の理に適はず、涅槃への道にあらす、然り偉大なるフライハイト（自由）への道にあらす、彼等の主張するが如き「自然の貴族制的根本法則」といふは、未だ十全なる天地の公道にあらず、尊嚴にして渾手たる宇宙法にあらす、單なる強者の權利の主張はまたつひに強者級之、弱者級之、主兵寶の取捨得宜の筈を蒙るに至らねば止まぬであらう。南無妙法蓮華經 紀元節に記す。

記事

本多上人第十三回忌を迎えて

幼兒が苦しい時とか悲しい時には必ず親を呼ぶやうに、時局彌々多難に際しては偉人哲人を憶ふことは人情でせう。近代の高僧、聖德院日生上人は獨り日蓮宗に於ける誇りだけでなく、全佛敎界に於ても傑出せる名僧であることは、日を経るにつれて眞金の煉として輝き渡るを想ふ。それには、「師殿にして道尊し」の通り、空師の護法道念の燃烈、寒秋枯澁の霜、又能く日生上人に見られる。「汝佛邊の塵となる勿れ」の一句を忘れず、三十年に亘る宗門の管長を捨て、自由の身となつて門下合同の知法愚圓會を創設、老耄を衝頭にさらして秋月の皎々たる下に、宗教信仰の妙味を連日連夜師子吼された大願建立の垂範は、全く未曾有の淨行と拜された。而かも内には法統擁護の大事を同師會に囑望しつゝ、教化方針の確立を期して生みの統一團を法人組織となすべく劃策し、半途で化を他方に遷されてより早くも十三年を経過した。然るに世相の變轉が激甚を極めて世界は大國群衆と化し、長期戦だ、百年戦争だと呼ばれ、今年は決戦期と舉國緊張しつゝ各その職域孝公に餘念もない。これ果して影日向なく國民は自覺反省し欣んで努力してゐるのであらう

か、此際私利に走り利潤を追ふものはないか、關取引の醜はないか、物資乏少でも人のものに手をつけないか、上戸は梯子などなく能く自重してゐるだらうか、貞操問題や破廉恥行爲などないか、畢竟倫理道德の線に沿つた生活が營まれてゐるか否かが、今こそ最も注目すべき時である、人格が低下して思想の頹廢を見るやうなことがあつては遂に胸を痛むも及ばないことになる、そこに「宗教なき國家は滅ぶ」といはれるのである。大宗敎家を憶れ、善知識を求めることの切なる心から、此の本多上人追憶記念會に當つて志を同ふする者が、吾も吾もと萬障を差擯つて上野の山に参集された。時は三月十四日第二日曜日午前十一時、名もゆかしい精養軒、彌圓の花には早い、密聚した若葉の眺めも一入である。

發起人中の實行委員藤部常任理事は、釋眞誓師と一番乗り、やがて田中理事は岩手より汽車で着いたばかりの疲れも見せずに来援、山田理事や小林先生も早くから手拭りのない様に準備を進められ、朝日、岡田、岡本、金城等の諸氏率仕の許に場内すべての用意が備へられ待つ間もなく讀々と俗も僧も、男も女も和氣彌々、或は椅子に、或は庭内に、或は日光浴に、一切を忘れて童心のやうな姿もうるはしい。姉崎博士が廊下の外に、椅子もない煉瓦の上にお尻をつけて長い足をくの字にして兩手を交叉しつゝ定三球の相で食るやうに慈光に浴して居られる。折柄日生上人の御令息禮三師は、夜行で使部から來着、聊か赤い眼をしてヒョッコリ入つて來られた、母上や姉妹は少々遅れるで

せうとの事、その内に大阪から御親戚の友廣老夫人御一行や、大井の沼部夫人、即ち日生上人の御令妹や、品川の鈴木御夫妻、其他大野御夫妻等もお揃ひになつて會場も賑はしくなつた。高島先生や山田博士が同時に見えられ、其前に山田宗務總監や星野社會部長等、又三吉師も宗會のつかれも厭はず参加された。山川博士は急に西下の餘儀なきに至つたと高橋氏を代理に、そして「君まさばと思ふことごとし」といしげし、法の旨にも國のためにも」の三十一文字を登影のみ前に掲げられた。先年鎌倉にお訪ねした時、昔の天晴會發展時代を追想されて、今昔の感に堪えないと種々の物語りもあつたが、最近清水師の遷化後は一層もの淋しいだらうとお察しする。

來會の各位殆んど揃つたから、正午御遺族を正賓に御親戚始め一同座席に着いて、簡素な午餐を俱にし、やがて藤部理事が發起人の一人として初めに御遺族並に御親戚の方々を對し、次に來會の各位に對して簡單なる挨拶を述べ、小林先生の司會のもとに追憶談が始められた。左に其の大意を略記する。

小林先生 本多上人の第十三回忌を営むるに就きまして、私も發起人中の實行委員で種々相談を受けましたが、最初の豫定では御生前、教恩に浴された人々が五六十人位お集りになるかと思つてゐました。段々に増えまして八十人以上にもなり、思ひがけない方々迄も集まりましたが、これは取りもなほさず本多上人の御遺徳の然らしむる所であり、御生前の事蹟が段々大きくなつたことに外ならないであります。

いつも本多上人は、日蓮門下は全體が一致して行くやうにしなければいけないと叫ばれ又努力されて居りました。また神靈佛の三教は協力立して日本文化に貢献しなければならぬと仰せられました。これを今から考へますと大東亞を建設することに就ての卓見であります。先覺者でなければ到底及ぶものではない。おなかりの後に其の御人格は益々輝きを増して参りましたが、將來を心配なさる方々には上人のことが考へられる譯でありませう。今日の會合はその意味で又お互は改めて御生前のことを憶ひ出して勵むべきだと存じます。

就ては二三の方にお話をお願ひ申上たいのでありますが、私がお名前を申せば必ずお立ちをお願ひ申上ます。では初めに近頃の日蓮宗々務總監の山田上人にお願ひ致します。

山田總監 宗會のため本日は出欠が定かでありませぬので欠禮致して居りましたが、やつと出ることが出来ました。私の如きは上人に私淑した者としては古い方でせう、明治三十三年頃學校時代から上人に敬服いたしてをり、學生中にもその名聲は轟いて居りました。上人は明治三十四年宗門の合同の魁であらせられ、講習會で講師をされてゐる時も、始終合同の念先鋒であらせられました。それが今日段々と機運が熟して参つたのであります。この全合同といふ事は教義上にも、傳道の上にも信仰團結の上にも未だ残されてゐる問題で、吾々に與へられた大きな勤めであります。

今日此の所は場所も甚だよいし、天候も晴やかで、なかなか

よい日であります。その上明治から大正にかけて日蓮宗のためににお働きになられた諸先輩がお集りになつてゐる。此のせかせかした世情の中で昔の事を偲ぶ事が出来て洵によい氣持で有難いことであります。御承知の通り明治の末から大正の年代といへば、日蓮宗の殉難たる時代でありましたが、本多上人は何時もその中心に居られました。また後援者も多かつた。學生の方面も同様で大勢講義を受けました。丁度「聖蹟」の出來る前後だつたので、その原稿を持つて來られてはお話をされました。

大正の初めに帝國教育會で、上人の國家觀を有識者仲間話されましたが、その人格識見の偉大には何人も心服したものであります。上人は引き續いて統一黨を中心にして講演をされて居りましたが、その席には亡くなられた大連大將、林中將、佐藤中將、矢野檢事等が中心となられ毎回列席されて居りました。

今日上人のお寫眞を拜して許らずも昔のことが考へられました。今月の二十九日は合同の話があることになつて居りますが、上人の御希望であらせられた宗門の結合を何とかして促進させたいと思ひます。今日の會を有難く感謝いたします。

姉崎博士 色々お話し申したいこともありませんが、これから出かけるころなので其の餘裕ありません。小林君は前途を樂觀して居られるやうですが、自分はさうは思ひません。上人がゐられたらば歡びを共にするよりも、憂を共にせられたらうと思ひます。

本多上人に就いてはいつもその讀書力に於て實に驚歎して居

りました。それで残念に思ふことは折角お書きになられた大藏經要義を中途で止められた事で、これは返す返すも遺憾であります。時間ありませんからこれで失禮致します。

(藤部曰、大藏經要義の未完成に就ては、從來お手傳されて居た親木師の逝かれた後、適任者のなかつた爲、不得止一時中止されて居りましたが、大正十五年春から再び要文編向に着手され昭和五年に至り、これから註釋に進まうとする頃から御病儀重らせられました。經文だけの抽出は出來てゐますから、今後は許す限り誌上に連載致します。どうか御諒承たまはり度存じます。)

三吉上人 私は本多上人には三十年程可愛がつて戴いたものであります。いつもお目にかかると、君は何時も若いナといはれてゐました。今日莊嚴されてゐるお寫眞の前で、御遷化後早や十三年も経つてしまつたのに、自分は何にも出來ずゐるのは悔しに堪えませぬ。上人が宗門統合運動の爲に、非常に御努力をなされてゐた、それを考へますと感慨無量であります。この上野といふ所は殊に統合に關係があるので、一層感懐いものがあります。

統合運動は中々六つかしかつたが、上人は教育と布教の事が大切だといはれ、大崎の學校に各派の講座を設け、又白山前に統合學校を設けて各教團に分れてゐるものを渾然と一系統にまとめ祖道へ復元といふことにされました。これ洵に有難いことといはねばなりません。然るに今日猶ほ全體の統合といふこと

が未だに出来ません、そのことを先程もお寫眞の前でお詫びいたしました次第であります。

上人の統合運動は、政治的、行政的の統合ではなく、教學の統一といふ所まで考へて居られました、そこ迄行かねば眞の統合になりません。今日上人が居られたらば、必ず全體を率いて居られたに違ひないと残念に思はれてなりません。

また品川の妙國寺で、木版の大藏經を携けて携出されてゐる姿が未だに見えるやうであります。上人はよくあれだけの學問を續けられたものと思ひます、布教の最前線に立たれて居ながら能く本を讀まれ、甚大な著述をなされました、私はこれと思ひ出しては自分の指針と致して居ります。

今日の武力戦、思想戦、經濟戦、政治戦の筋金となつて居る日蓮上人の教學、即ち知法愚國の旗の下に、門下が一致協力して一日も早くその御願報しをせねばならぬと、お寫眞の前でお誓ひを致した次第でありました。

高島先生 本多上人とは深い長い間の交りがあつた譯ではありませんが、上人は實に先見の明ある獨創的の方であつたと尊敬して居ります。今の若い方もこの上人の着眼に注意してほしいと思ひます。そして上人は宗教を否定する者にはドンドン突込んで教化されてゐました、その中には軍人や學者もあれば政治家もありましたが、マア軍人は單純だから集まつて来るものだと思ひましたが、實はさうでなくなかなかしつかりした人達でした。

さういふやうにして上人は、宗教は生きた社會を導くものだといふことを證明された。特に私の感じたことは、明治三十二年幸徳秋水事件が起つた時、司法大臣の頓解を得て始めから終りまで、毎回傍聴をされ一々ノートに取つて置きどうしてそんな大逆事件を起したかの原因を突きとめて根本的に思想指導に努められた。其後難波大助の時も、司法省の許可を得てかの獨房に入つて種々説得に努められた、こゝいふことまでして彼れに懺悔の心を發さしめ、その魂を救はんとされたのは大きな慈悲の發露でせう、上人は飽くまでも宗教、この法華經の感激を以て大に教化運動を興し、人心の善導に竭されました。

又個人としては私の知己として感謝して居ります、世間では大學出身でないと又肩書がなければ、たとひよいことをいつても用ひません、然るに私の説を盗用しつづ知らぬ顔して自分の創作のやうにつくらつて居たものもあります。處が上人は決してさうでなかつた。一例を挙げますと、日蓮聖人を哲學の上から、或は文學、心理學の方面からも見ることも出来ず。高山樗牛は文學的方面から之を見ましたが、心理學上から見て説いたのは私が初めてであつた、その講義を大學でやつたのでした、上人は私のことを非常によく知つて呉れました。

近頃の思想傾向を見て、若い方々は是非上人の書かれたものを讀まれないと思ひます、今は色々の事情で出版も中々出来難いですが、上人の本などはドンドン出版されれば宜しいと思ふ。マアこの邊にして今日は昔に若返つたやうで嬉しいのです、

皆さんに謝禮を申し上げます。

山田博士 本多上人の御教や、思想善導の方面に御活動なされたことは、皆さんのよく御存知の通りであります。又上人は門下の統合運動に就て大に力を盡されました、統合問題で第二回目は、日本橋の濱町で大會が開かれ外部からも多數の清浄者があつて殆んど出来かかつたが、或る方面から一種の運動が起つて今一步の所で妨げられて出来なかつたことは尚に残念でした。それ以来今日迄出来なかつたが、今三派だけの合同は出来ましたが、未だ全體が纏まつて居りません、今日は宗門が皆一致統合になるべき時と信じます、どうか一日も早く實現することを念じて居ります。

また私個人としての感謝して居る所を申し上げるならば、私が日蓮聖人のことに心を向けたのは専ら上人のお蔭であります。上人程信仰を人に植付けるに卓越した人はいません、お話を聴く毎に大きな感動を興へられます、色々教義の上に理解を興へて呉れる人はありますが、信仰を植付けられる人は少ないものであります、自分も妻もこの信仰に導かれた恩師として尊敬致して居ります。上人のことを憶ふ時、誰か上人の教を傳へる人はいないかと思つて甚だ心細いが、幸に統一團があつて藤部清事君が居る、法燈正に消えんとする時、藤部君の存在は心強い限りであります。又教學上には河合勝明君が居る、蘭身本佛論の學風を努力されて居る。その大成を祈るものであります。

私は小林君と法華會を創設してから三十年にもなりますが、

それは北海道へ一緒に布教に行つた時、上人に刺戟されてはじめたものであります、これは外部からの運動としてやつて居ります。意氣込とすれば宗門の連中に負けない積りでやつたのであります、専ら上人のお蔭であります。顧みればお説くなりになつて十三年にもなりますが、自分共の浮業が運々として進まないのを遺憾と思ひつづこの事を上人の御靈前にお禮を申述べ、將來をお誓ひ致したのであります。

小林先生 未だ澤山の名士僧侶の方々が居られて名残も盡きませんが、時間の都合もあるので、この邊で打切り、禮三御子息の御挨拶を伺ひます。

御息 父が私達家族の者を見て笑つて居られると思ひます、それは何のやうな笑ひかといへば、マア皆そこにお並びなさいといつてニッコリされて居るでせう。顧みれば吾々は却つて上人のお徳を損傷して居る者のやうな氣が致します。母や女の姉妹は別として、自分などはとても叶はぬことだらけであります。といつて皆様から父の徳をいはれますと、子としては何とも言葉に現はせられない位嬉しいことでもあります。皆様今日は寔に有難うございました。

これから一同は別園の庭で記念寫眞を撮り、再び莊嚴された上人のお寫眞の前に集り、山川博士の追憶の歌を高橋氏代讀され、續いて山田總監主唱の支那齊唱に滞りなく閉式、餘韻は永く上野の山に響いてゆく。

法要と講演 同夜六時、本部に於て御令息禮三師を迎え、和賀、

らねば可哀さうのみならず、人心を毒すること甚しい。お墓参りと卒塔婆の關係深いことを思つて一寸附記する。

南無妙法蓮華經

本部 團報

彼岸會 人としての尊卑はその理想の優劣に依つて別れる、此の迷途の岸から煩悩生死の河海を信智の眼を開いて彼の大悟の岸に到るべき理想が最高のものである。「日蓮は今生の祈りなし、ただ佛に成らんとおもふ計りなり」佛の妙智、佛の大慈悲、佛の無礙の力用を體得する時、眞の淨土が此處に實現する。ここに達成する私共の日常生活には先づ親に奉へるといふことが根本である、賢聖の教の示す要は父母孝養のことである、貴賤男女の別があり、各境遇が異なるから實行方法には色々分れるが、孝行の心根は一つであり、それが上に向へば忠となり、妻子には敬愛となり、友達には協和となり、周圍の人々には感恩扶助となりなどする一切の善行の基本である。更に故人に對しても回向供養の出来る即ち靈魂の世界に自在に交渉出来るのは獨り法華の有難さであります。従つて祖先追孝の本義は、全く妙法蓮華經の法味によるべきであるといふことは教理の示される所である。本部では二十日午後三時開會の婦人會、二十一日朝の皇靈祭及び二十二日朝六時の清集に於て結縁の團員諸友のみならず、大東亞戰陣病歿諸靈の追福を祈り、又護部理事

釋等の諸師、團員有志靈閣から引續きの方もあり、新しき方も交つて一同直心の法味を捧げた。法要後護部理事は起つてこの御法要こそ上野の清集よりも、品川の墓参りよりも最も大切な御年忌行事であることを述べて、上人の遺徳を追慕し、代つて小林先生は、現在國民の宗教を輕視したり、排佛の思想がどうして起つて来たかといふことを根本的に明し、西洋崇拜の起因を指摘し、本多上人の東洋文明の權威高調に及び、更に苦勞の足らぬ人々の反省を勸め、佛教の厭世消極の方面を開顯して法華の卓越に來り、上人の普眼點の急所を示して實生活に即せる信仰の力を説き、知恩報恩より施恩に及んで一同の自覺反省實行を促し、これぞ上人への教恩に報ゆる一つであると結ばれた。又和實師、河合講師も上人の教徳熱辯大衆隨喜唱題裡に閉會した、時當に九時半。來會者一同へ朝日一郎氏始め岡田、岡本等の諸氏の多大なる奉仕の許に、福神演一燈宛の御供養出來たことは、これ偏に上人の御徳の及ぶ所と感謝甚深であつた。

品川展喜 十六日御祥雷の午後二時、妙國寺で有志参拜、法味を捧げた。この機會に本多上人と最も親しくされてゐた佐藤殿太郎中將の第一周忌御回向も營み得たことも結構に思ふ。妙國寺境内の老松が殆んど皆、日生上人の御跡を追ふて枯れて行く、哀れにも亦悼ましい。

このお寺の近くにある一寺院では落傍の弊が、生々しい卒塔婆でめぐらされてゐた、いかに代用全盛の時とはいへ、この暴狀には厭過する譯には參らぬ、心ある坊さん仲間でも忠告してや

の法話があつた。
聖典講座 小林先生の聯聲經講は三月十三日の土曜日に多大の法益を興へられつ終講となり、二十日からは新しい講座として先づ數回に亘つて法華經の概要が話され、更に法華傳に及ぶのであるが、最初には法華經のお話といふことになれば、どうしてもお稱蓮様の御一代を知らねば、何故に法華經がソツナに尊い有難い經典かといふことは徹底せぬから、先づお稱蓮様のことを説かれねばならず、お稱蓮様を拜するにはそれ迄の印度の歴史に及ぶ譯で、歴史と共に地理も關聯して説説されることになり、こうして根本から順序を立ててお話を聽聞すれば、佛教には無智の者も十分に理解され、信仰心も芽を發して來る。かかる好機は再び得難いであらう、護障を排除して道念を育くむべきである。萬代に悔を貼さぬやうに願ふたい。

友廣すみ善女人急逝

本多上人の御年忌に、遙々大阪から和子若夫人及び同信の杉本夫人とお三人連で上京され、品川の鈴木家をお宿にして十四日の上野に於ける記念會にも、十六日の妙國寺お集りにも無上の歡を以つて所謂歡喜奉行され、十七日は終日鈴木家で打くつろいで信仰談を滿喫、午後九時半頃病變よく就寝されたが、一時聞ばかり經て若干心臓の故障を發されたので、平素から時々發作あることなんですべての用意も整つてゐたが、更に近所の醫

者の手當も受けられ、復安々と休まれつつあつたが、初更も過ぎ三更の頃急變あつて遂に靈山に往留されて了つた。何といふはかないことか言葉も出ない、出づる氣入るいきを待たずである。けれどもその美しい安詳とされた遺骸に幾多の悲しみも打消される。行年六十四歳。聖訓に云く「誠に生死を恐れ涅槃を欣び、信心を運び渴仰を致さば、遍滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日のうつつなるべし」と、
嘆みてその御冥福をお祈り申上げる。
南無妙法蓮華經

團費誌料維持費及寄附金領收(自二月二十一日至三月二十日)

- 一金貳圓五拾錢也 東京 安江 清海殿
- 一金壹圓貳拾錢也 福岡縣 大久保 久市殿
- 一金 參圓也 山口縣 荒木 ツル殿
- 一金 五圓也 福島縣 玉木 久子殿
- 一金 拾圓也 東京 宇野 博順殿
- 一金 五圓也 大阪 大越 信吾殿
- 一金貳圓貳拾錢也 神戸 舟橋 英一殿
- 一金 參圓也 富山 石黒 政次郎殿
- 一金貳圓貳拾錢也 福島 熊井 リキ殿
- 一金貳圓貳拾錢也 山形縣 遠藤 豊次郎殿

一金貳圓貳拾錢也	小田原	坂井日好殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	貝塚敏二郎殿
一金貳圓五拾錢也	東京	森山太郎殿
一金參圓也	千葉縣	出口眞道殿
一金壹圓參拾錢也	東京	本郷常次郎殿
一金貳圓貳拾錢也	神戸	林重太郎殿
一金貳圓五拾錢也	福岡縣	日向勇殿
一金四圓四拾錢也	東京	平松市藏殿
一金五圓也	山形縣	長澤辨太殿
一金五圓也	東京	森川泰修殿
一金五圓也	同	三吉顯隆殿
一金五圓也	同	伊藤和歌殿
一金六圓也	同	金指龜吉殿
一金五圓也	同	菊地雄三殿
一金五圓也	同	土屋けん殿
一金貳圓貳拾錢也	同	近藤靜子殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	大木勝司殿
一金壹圓八拾錢也	彦根	林田義夫殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	水也田呑淵殿
一金貳圓貳拾錢也	福岡縣	大久保久市殿
一金貳圓貳拾錢也	高岡	時友太助殿
一金貳圓五拾錢也	東京	島山友次郎殿
一金參圓也		櫻井惣右衛門殿

右雜有入帳仕候也(以是領收證代用)

財團法人統一團會計

感謝

本團前理事井上道太郎氏より先般講堂用擴聲裝置(電氣蓄音器、ラジオ兼用)壹臺を御寄贈下さつた。洵に有難いことである。茲に深く謝意を表します。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	羅天覽	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓九拾錢
日蓮主義精要	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓

佛敎の心髓	同	金壹圓七拾錢
動行作法	同	金拾錢
本多日生上人	同	金壹圓七拾錢

河合諺明著	定價	金壹圓
皇道と日蓮主義	送料實費	

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一團 定價一統
一冊 金貳圓拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
○御購付ノ場合ハ必ず新書共ニ御通
知ノ事

昭和十八年三月二十八日印刷
昭和十八年四月一日發行
(第五百七十七號)

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯部 磯部 滿 事
發行人 磯部 滿
東京市四谷區內藤町一
印刷人 山田 英 二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

次 目

法悦と願行(其二).....	本多日生
開目鈔講話(第四十八講).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十三).....	河合陟明
大藏經要義續篇(第二十八).....	本多日生
和歌.....	大八木義雄
記事	

○本部圖報 ○年度報告 ○入帳報告

號月五年八十四第

統 一

昭和十八年十二月二十七日 第三卷第三號
 昭和十八年三月二十八日 第三卷第四號
 昭和十八年四月二十八日 第三卷第五號
 昭和十八年五月二十八日 第三卷第六號
 昭和十八年六月二十八日 第三卷第七號
 昭和十八年七月二十八日 第三卷第八號
 昭和十八年八月二十八日 第三卷第九號
 昭和十八年九月二十八日 第三卷第十號
 昭和十八年十月二十八日 第三卷第十一號
 昭和十八年十一月二十八日 第三卷第十二號

第五百七十七號

第四十八年 四月號

統

法財人編
 統
 一
 團
 發
 行